
もしもアメリカに彼女が出来たら…

アマノン ジャック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしもアメリカに彼女が出来たら…

【NZコード】

N18770

【作者名】

アマノン ジャック

【あらすじ】

ヘタリアのアメリカにもし、彼女が出来たら…

(前書き)

ヘタリアのアメリカをカラオケでしか知らないのに書きました。

本当にあまり知りません。

「ねえ…」

彼女はアメリカに話し掛けた。心なしか表情が暗いように見える。

「どうしたんだい？ そんな深刻な顔して…」

アメリカは彼女を心配そうに見る。

「悩みがあるならハンバーガー食えよー美味しいくて悩みなんて吹つ飛ぶぜーー！」

彼女に向かつて何処から持つてきたのかハンバーガーを差し出すアメリカに…

「はあー… 私、貴方が心配なの…」

溜め息とともに口を開く彼女。

「心配つて何が？」

「… 貴方の身体が。このままハンバーガーばかり食べると栄養が偏つて死んでしまうわ。」

「H A H A H A ! 何、言つてんだよーー俺のハンバーガーは栄養満点で飽きないんだぜ？」

彼女の心配を笑い飛ばすアメリカ。

「お前もそんな事で悩むなよ？ さあ、冷めないしつこいハンバーガー

「食いな」

「…いらない。」

「Oh～！食わないだと？俺特製スペシャルデリシャスグレートM
AXハンバーガーを受け取らないなんて…」

ハンバーガーを持つ手が驚愕で震える。

「お前が食わないなら、俺が食うぞ！」

ハンバーガーを食べようとした手を彼女が止める。

「What? やつぱり欲しいのか？」

「違う。」

「なら、手を離してくれないか？」

彼女は手を離さずにもう片方の手からハンバーガーを取り出した。

「？」

「私ね、貴方の為に作ったの。貴方の…メタボ改善バーーガーを！」

「メ、メタボ改善バーーガーだと？」

「もしかして自分が太ってないと思つてゐる？そんな訳無いでしょ…」

鏡見て来いつ〜の…！」

やや口調が崩れてきた彼女にアメリカは“メタボ”といつ言葉にシヨックを受ける。

「付き合つた頃よりも丸くなつてゐるわね…ひょつとして体重も増えたんじやない？」

「ギクッ！」

「ふうん？増えてるのね…体重。可笑しいわね？痩せるから付き合

つてつて言つたの誰だつたかしらねえー？「

ニッコリ微笑みながらアメリカを見る彼女。しかし笑つても関わらず全体的に怒りのオーラが滲み出でていた。

「ねえ？どうしてかしらね？ウフフ…」

（ひい！怖つ…）

「黙つてないで…さつさと理由述べるや？」

明らかに口調が悪くなつた。実は彼女…ヤの字のお嬢様であつたりし、怒ると口調が極端に悪くなるのだ。付き合つた後に知つた事だが…

「喋らねえと、てめえの（自主規制）をハンバーガーに混ぜんぞ？」

「オラ！」

「ノオ！勘弁してくれ…！」

「で？何が原因かな？」

蛇に睨まれた蛙のように汗を搔きまくら震えるアメリカ。

「お、俺のバー・ガ―が原因です。」

「あら？急にどうしたの？私達、付き合つてるんだから別に敬語じやなくて良いのよ？」

「いえ！俺が悪いので使わせて下さい…！」

日本に教わった土下座を彼女の前でするアメリカ。

「そこままでしなくて…分かれば良いのよ。でも、貴方つてハンバ

ー・ガ―馬鹿…ゴホ！やだ、間違えちゃつた

「え？今、馬鹿つて言つた？」

（え？今、馬鹿つて言つた？）

「ハンバーガー好きじゃない?だから一生懸命に作つてみたの。」

照れながらもじもじとハンバーガーを差し出す彼女。

「Oh! 激えな。どんなバーガーなんだい?」

「ウフフ… 包みを開けてみて。」

「どれどれ…」

アメリカは言われた通り包みを開けてみた。すると…

「…What? 何の匂いだ?」

「あ、それ日本さんから頂いた納豆つて食べ物よ。」「す、素敵な smell だね…」

「でしょー! でも凄く体に良いのよ? 私も食べてみたけどネバネバして美味しかったわ!!!」「ネバネバしてんの?」

若干引き気味のアメリカに気付いた彼女は尋ねてみた。

「え? 何? ネバネバ嫌いなの?」

「Yes。口の中が変になるから嫌いだ。」

「まあ! 好き嫌いは良くないわ!! それで太るのね…」

「太って言うな!」

「あん? 事実だろうが! てめえがアンバランスに食うから太つてんだろ!!」

好き嫌いの多いアメリカにキレる彼女。

「大体何でお前のバーガーは肉3枚入つてんだ? 流行りなのか、ただ食いたいだけなのかは知らんが… カロリー増やしてんじゃね? よ

！」

（うわあ…何で知つてんの！）

実はこのお肉たっぷりバーガーは彼女の前では（絶対に）食べてはいないのにも関わらず何故かバレていた。

「ハンバーグだって肉と玉ねぎだけでしょ？本当に栄養満点にした
いなら凍り豆腐や人参、ピーマン、も加えなさいよ！」

「人参もピーマンも嫌い…」

「はあ？ アンタねハンバーグにみじん切りにして混ぜれば氣になら
ないわよ！」

「Real?」

「ええ…分かったわ。少し待つてなさい！」

そう言つてキッチンに向かつた彼女。

数十分後。

「ほら、出来たわ！」

彼女が作ったのはベーグルにレタス、トマト、ケチャップ、そして
野菜ハンバーグを挟んだハンバーガーだった。

「トマトはイタリアさんから頂いたわ。で、ベーグルは普通のバン
ズよりカロリー低いから使って、繋ぎにパン粉と玉子の他にアボガ
ドも入れてみたの。食べてみて！」

差し出されたバーガーはとても良い匂いがし、見た目も普通だった。
アメリカは意を決して口にする。

「〇ー！ テリシャス！ ！」

「やつた！」

ガツツポーズを決める彼女。アメリカはあまりの美味しさに一気に平らげる。

「」馳走様。」

手を合わせ、去るうとしたが…

「あら？ まだ食べ終わってないわよ？」

「え？」

「私の納豆バー ガー よ。早くこっちも食べて？」

「い…いや、もうお腹いっぱいだし。」

「肉3枚食べれるのに？ 肉1枚のバー ガー ジャお腹膨れないでしょ？」

冷や汗を搔きまくるアメリカ。

「大丈夫よ！ 納豆に合うようにレタスの代わりに大葉、肉の代わりにマグロを入れて…ソースはわさび醤油にしてバンズはご飯にしたから！！」

「い、いや、気持ちはThank youだが今日腹の調子悪いし

…」

ブチ！

何かが切れる音がした。

「ああん？ てめえ私の作ったバー ガー が食えねえって言いつのか？」

「そうじやなくて…」

「グダグダ、つるせえなー！男なら黙つて食えやーーー！」

彼女はバーガーをアメリカの口に無理矢理詰め込んだ。

「むぐ！　～！！」

アメリカは口の中の納豆の匂いとネバネバに悶絶し気絶した。

それから、アメリカは彼女によつて痩せたかどうかは未だに謎である。

(後書き)

野菜ハンバーグはこの前作つたら本当に美味しかったのでオススメです！

レシピは更新記録に載せようと思ひます。興味のある方は是非参考に作つてみて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1877o/>

もしもアメリカに彼女が出来たら…

2010年10月10日13時00分発行